

Ⅵ 上江田西田遺跡・源六堰遺跡 出土の古墳時代土器について

本遺跡の発掘調査において、古墳時代の遺構はほとんどみられなかったが、河道に堆積したと考えられる黒泥土層より、古墳時代前期に主体を置く土器が多く出土している。群馬県の古墳前期を代表する土器として「石田川式」の名で広く知られる標識遺跡の石田川遺跡は、本遺跡から南東に約8kmの位置にある。この他にも、重殿遺跡、高林遺跡など古墳時代前期の遺跡の分布密度がかなり高い地域であることがよく知られている。本遺跡の調査要因である石田川は、大間々扇状地を水源として小刻みな蛇行を繰り返しながら南東方向に流下しており、やがて太田市の南端部で南流してきた蛇川と合流する。このような大間々扇状地を開析する河川や扇端湧水池から流下する小河川の堆積物によって被われた広い沖積地は、頼母子古墳、朝子塚古墳のような4世紀代の古墳を初源として、その後も連綿と古墳群が築かれていることから、古墳時代以降の集落・生産域として安定していた地域であったことをうかがわせる。その一方で、弥生社会の地域形成があまり発達しなかったことは、弥生遺跡の分布状況の稀薄さが雄弁に物語っている。いわば、古墳時代前期になってから急激な開発が始まった新開拓地域であり、その歴史的動向そのものが群馬における弥生時代から古墳時代への大きな社会的転換をもたらす象徴的な歴史的事実であったと類推される。ただし、その地域社会形成に至る過程については、S字状口縁台付甕（以後「S字甕」と呼ぶ）の主体的分布から想定された東海地方西部からの「入植」や「集団移住」によるとの解釈がもっぱらである。これを歴史的事実として認定できるか否かは、当該地域における弥生時代後期から古墳時代前半の遺跡に関する詳細な分析の如何にかかっているが、本遺跡ではその一助とすべく出土した古墳前期の土器群について概要を述べることにしたい。

1. 器種について

壺、小型壺、直口壺、台付甕、甕、小型甕、鉢、高坏、小型器台、結合器台、有孔鉢小型丸底壺が見られる。遺構に伴う一括資料ではないので、器種組成分析のためのデータとしては不十分だが、当該地域の古墳時代前期集落でみられる器種組成とほぼ同様と考えられる。ただし、直口壺及び遺存度の良好な高坏や器台が、他の器種に比べてやや多いとの印象を受けること、焼成後底部穿孔の壺（第36図-53）が見られることから、埋没谷堆積層中からの出土である点を積極的に評価して、単なる集落からの日常器の廃棄ではなく「水」に関する祭祀関係遺物との想定も用意しておくべきだろう。群馬県では、本格的な農耕集落が形成された弥生時代中期後半から後期にかけて、稲作文化とこれに伴う祭祀も伝播したと想定できるが、「水」に関する祭祀的な遺構や遺物は非常に稀薄である。ところが古墳時代前期に入ると、低湿地への大規模な水田開発とともに「水辺」や「湧水」での特定器種（壺や高坏）の廃棄や井戸への土器、祭祀遺物廃棄（埋設か）行為がしばしば見られる。上江田西田遺跡出土の古墳時代前期土器群についても、南隣する源六堰遺跡（本書）や、石田川両岸に点在する微高地上の谷津遺跡や中道遺跡（文献1）を含めた古墳時代前期集落群に付随する「水」の祭祀関連遺物との見方を残しておきたい。

2. 型式的特徴について

壺は、退化した折返し口縁（第33図-1・2）、単口縁（第33図-3・7・10）、二重口縁（第33図-4・5）の三種に大別される第33図-1は内彎口縁で外面に稜をもたず、同図-2は外反して外面折返し端部にわずかな段を有する。前者は、大粒の赤色鉱物粒（酸化鉄化合物）を含む胎土を主な特徴とする他の土器と異なり、浅く粗い刷毛目を施す点

も同図－2・3とは異質である。やや肥厚する内彎形の口縁からその類縁を求めるならば、吉ヶ谷式や弥生町式の系譜が候補にあげられよう。これに比べ、大きく外反する同図2・3は、在地弥生土器の樽式の系譜に連なるとも考え得るが、同様の特徴を持つ東海西部系や北陸系の外反口縁壺の流入やそれとの融合が進捗する段階での土器だけに、単一系譜での理解は避けておくべきだろう。二重口縁壺は、第33図－4・5とも頸部が直立する典型的な「茶臼山型」壺である。5は胎土の特徴から現地産と考えられるが、稜線が明瞭で丁寧な研磨を施す特徴から、畿内産に近い印象をもつ。これに比べ4は段状部の稜線が弱く器面研磨も見られない。ただし、5とはほぼ同大同一形状であることから、同時期に使用されたことは間違いないだろう。第33図－9は、櫛描横線文と篋描き鋸歯文の組合せ施文という文様構成からパレススタイル壺の類品としてよい。ただし、横線文を4段重畳させて幅広の横線文帯を施文し、その上に鋸歯文を描く手法や、鋸歯文がかなり乱れている点は、尾張地方のオリジナル品の文様から逸脱した印象を与え、胎土の特徴から在地品であることは間違いないものの、その稚拙な模倣品か年代の下る退化品と考えられる。直口壺（第33・34図－11・12・13・16・17）は、「瓢壺」の系譜を引く内彎気味口縁にやや扁平な球形胴をもつ11～13と、球形に胴径とはほぼ同大の口径をもつ16の2種に分けられる。後者は後出型式の可能性もあるが、ここでは系譜の異なる同時存在と捉えておきたい。ちなみに、11は赤彩の可能性が高い。小型壺10は直口壺と同一用途で理解しうるが、曲線的に屈曲する頸部形状や長胴気味の胴部形状から、東海西部や畿内ではなくむしろ関東地方南部の弥生終末期～古墳前期に類品を見る。

甕については、S字甕、単口縁台付甕、平底甕の3種があり、数量比は不明である。S字甕（第34図－21～27、第36図－50・51・58）は、全形の判明する出土例がなかったため明確な基準での型式分類はできない。口縁形態では、口唇部上面にヘラナデ

による面取り（22・25）、丸縁（23・24）、口縁内面に弱い沈線状のナデ線（21・26）、尖端縁（27）の変異が見られる。肩部刷毛目の工具は鋭く細かい櫛状具（21～23・25・26）と目の粗い櫛状具（24・27）がある。肩部への櫛目による横線は22・26、源六堰遺跡2号住例（第68図－2住6）に見られる。これはかすれ気味の施文で、すでに横線文としては退化した最終段階のものといえよう。ただし源六堰遺跡2号住例は頸部内面に横位刷毛目が見られ、口縁上段部の屈曲が強く小規模な形状から、他のS字甕より「型式的」に先行すると考えられる。さて、本遺跡出土のS字甕で注目されるのは、胎土の違いである。22・24及び25・26が赤城山南麓に多いと思われる安山岩系鉱物（輝石、石英、白色岩片主体）を多く含み、後者はさらに赤色細礫（酸化鉄鉱物）が多いという特徴が見られる。前後者の違いは素地粘土の差ではないか。これに対し、21・23・85は本遺跡の他器種の主体となるチャート、石英、白色岩片などの細礫を多く含む、見た目にごつごつした印象の胎土である。大量のS字甕が出土し、粘土採掘坑が検出されたことからS字甕生産地との性格が濃厚な伊勢崎市波志江中宿遺跡での胎土分析を参考にすれば、本遺跡の22・24はこれらとほぼ同質と考えられる。S字甕というと、その画一的な形態的特徴から、拠点生産地から分布域内への広範な供給を想定しがちだが、ここに見られる胎土のバラエティからは、複数の生産地からの供給をも想定しておくべきだろう。単口縁の甕類は全形の判明するものがないため、台付甕と平底の判断ができない。ただし、第36図－54～57の脚台部は、東海～南関東地方に類例をもとめられるもので、単口縁台付甕の存在は間違いない。第40図－28はその想定例だが、別個体の可能性もある。特に、第36図－59の低く大きく開く脚形状は三河～遠江地域における大型台付甕の流れを汲む形態と考えたい。単口縁甕の口縁形態には、丸縁（28～30・33）、外端に面取り（31・38）、肥厚（29・32・39・41）のバラエティが見られるが、積極的な型式差を認めるには不十分であろう。頸部が強く彎曲し

て開き、口唇部が受け口状で小さく上方に尖る形状の40は、北陸北東部系とみてよい。43は胎土と整形技法の近似から同一個体の可能性を示唆したものだが、平底か脚台付きかは不明である。口縁形態から受け口の甕ないしはS字甕の模倣品の可能性がある。なお、46は細い棒（直径5mmほど）で口縁外側に刻み列を施し、頸部以下には太い櫛目具による刷毛目整形とみられる口縁片で、挿図掲載したなかでは南関東系を想定できる唯一例である。

高坏は元屋敷系大型高坏（第37図-62・63・70、源六堰1号住・同2号住例と有稜杯部（64）と椀形杯部（66・69）の小型品、及び時期的に後出する柱状脚高坏（92・93）がある。84と85は有稜高坏の底～脚上半部である。椀形杯部小型品は口径が小さく、杯部も浅いことから器台の可能性もあるが、底内面に摩耗痕等は確認できない。源六堰1号住・同2号住例は口唇部内面に明瞭な稜が見られること、底面中央に円形凹みを残す整形など、東海地方西部のオリジナル品に忠実な形態を保っていることから、上江田西田遺跡例よりはやや形式的に先行するものと捉えたい。

器台は小型器台と結合器台（装飾器台）に二分される。小型器台は器受け部が直線的に開く皿状（72・76）、有稜（73・77）、内彎（74・75・77）の変異が認められ、口縁形状では、面取り（72）、つまみ上げ（75）、有段直立（77）が見られる。結合器台（79～83）は受け部底面で鐙が突出する形態で、唯一受け部口縁形状の判明する79を見る限り、段を持たない形態だろう。これは関東地方～北陸北東部に多いとされるが、底面から脚部への貫通孔が見られないことから、「高坏」として製作・機能したとの考え方もできよう。小型器台の脚部形状は、中位からやや屈曲外反して裾部が大きく開く形状で、結合器台は脚全体が大きく開く形状（83）を示す。67は口縁部を外側に付加して外反させる形状で、北陸系の器台と思われる。ただし、胎土の特徴は在地品と変わらない。

埴（110）は1点のみ掲載した。胴部の上半を研

磨、下半を削りで仕上げる扁平球形で、下半は著しい剥離が見られる。器台と対で使用したための剥離痕と推測される。口縁を欠失しているが、強くすぼまる頸部から内彎気味に長く立ち上がる口縁形状と想定される。

有孔鉢（94・95）は、やや内彎する逆円錐形で、平底中央部に一孔を穿つ。ほぼ完形で出土した94は、外面の片側1/3に二次的的被熱変色部と焼成時と思われる黒斑を見るが、口縁近辺での煤付着や被熱痕は見られない。また底部孔の直径は7mmと、この種の有孔鉢としては約1/2ほどの小ささである。内面全体に白色付着物が残っており、「甑」ではなく「濾過器」的機能を想定したい（文献2）。ただし、口縁内面1cm弱の巾で器面が剥離したような痕跡がみられるには、「蓋」使用を想定すべきか。意図的な類例調査の必要がありそうだ。

3. まとめ

上江田西田遺跡・源六堰遺跡から出土した古墳時代前期の土器の特徴について概要を述べてきたが、そこから判明した時期的位置づけや、今後の検討課題を提示したい。

まず編年上の位置づけだが、古墳前期のなかでも中頃、群馬県を地域毎に分割した編年を作成した深澤案に従えば「渡良瀬川流域」の3期に相当しよう。深澤は3期のなかで、重殿遺跡4住例を古段階、五反田遺跡2住例を中段階に位置づけているが（文献3）、上江田西田遺跡出土土器群は中段階、源六堰遺跡1・2号住出土土器は古段階に位置づけたい。これは、尾張地域での編年ならば「廻間Ⅲ式」の範囲に含まれるものと解され、赤塚氏の暦年代観（文献4）に従うならば、3世紀後半代のなかで理解すべきであろう。歴年代比定は、残念ながら東日本での年代測定データや暦年代資料が不十分なために、近畿、東海西部、北陸といった地域編年との並行関係から類推するしかないのが現状だが、現在における西日本各地での暦年代データの成果（文献5）から、これまで支配的であった群馬の古墳前期イコー

ル4世紀との認識は、少なくとも50年は遡らせて考える必要があるようだ。

群馬県の古式土師器として「石田川式」がよく知られている。これは、昭和27年に石田川河川改修工事に伴って採集調査された資料を基に松島栄治氏によって様式設定がなされた（文献6）。そこでは様式の示標をA区1号住出土のI群土器で代表させている。その内容について現行的な捉え方をするならば、伊勢型二重口縁壺、S字甕、（S字）鉢、小型器台、有稜大型高坏、小型丸底埴、直口壺の組合せとなろう。言うまでもなく、これらの土器型式と器種組成は「石田川式」認定概念の中核ではあるが、時空を限定する「様式」の認定条件を提示している訳ではないと解する。二重口縁壺が「伊勢型」でなく「茶白山形」でも良いと思うし、『石田川』に図示されたように小型器台や鉢の口縁がS字状に屈曲する型式である必要もないと思う。それは調査された一括出土土器のセリエーションから石田川式の構成型式を吟味、抽出すれば自ずと様式概念とその範囲が明確になるのではないか。ただし、問題はそれほど簡単ではない。弥生時代末～古墳時代前期における遠距離多地域間の土器移動の実態は、「東海西部系」土器の移動あるいはその影響で理解しようとしてきた「石田川」式を翻弄しているといつてよい。本遺跡出土土器の特徴でも述べたように、「石田川」式の象徴的型式でもあるS字甕は、少なくとも遺跡単位では単一相ではなく、単口縁台付甕や平底甕と共存しており、これらの故地は現在判明している限り、東海地方西部はもとより東海東部（遠江・駿河・相模）、南関東（武蔵・総）、北陸（能登・越）に求められるものが多い。ましてや平底で無文の甕ならば、在地の樽式や吉ヶ谷・赤井戸式などの変容型式も考慮する必要があるのだ。このような現状で群馬の古墳前期土器を「石田川式」概念で包括あるいは代表させることは、歴史の限定者としての様式（型式）として意味をなさない。群馬県東南部の低地帯には古墳前期の遺跡が非常な密度で分布しているが、たとえ隣接する遺跡であっても異なる系統の

土器型式が全く異なる組合せであったり、構成比率であったりする。本遺跡の時期と位置づけた古墳前期中葉段階は特にその傾向が著しい。太田市の東接地域、渡良瀬川を渡った佐野市松山・エグロ遺跡ではS字甕ではなく単口縁平底甕、台付甕が主体となり、なおかつ遺跡単位で甕型式の構成比率が異なることが指摘されている（文献7）。複数系譜の異なる土器群が共存することで、遺跡毎、一括遺物毎といった階層の異なるレベルでモザイク状態を呈しているのが実態といえるだろう。このような複雑な型式群の組合せが予想される中で、改めて「石田川式」といえる有意な様式設定を図る必要があろう。よしんば、それが型式なり様式設定に至らなくとも、複雑なモザイク模様のひとつひとつを解きほぐす作業は欠かすことができまい。（大木）

参考文献

- 1) 1988 増田 修『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡発掘調査報告書』東京電力株式会社
- 2) 1997 大木紳一郎「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡V』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 3) 1998 深澤敦仁「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』16
- 4) 2006 赤塚次郎「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 5) 2006 『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 6) 1968 尾崎喜左雄 今井新次 松島栄治『石田川』
- 7) 2003 仲山英樹「栃木県佐野市松山・エグロ遺跡の検討」『研究紀要』11財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター